

富士登山の記



一、プロローグ

それは、三年前の六月のある日、隣りの席のHさんの囁きから始まった。

「ねえ、富士山に登らない？ 登りましょうよ、山頂で見る日の出は、それは素晴らしいから！」

「富士登山ですか？ 大変そうですね。まあ、考えておきましょう」

丁重にお断りするつもりだったが、たびたび聞かされる誘いの言葉に根負けしたのか、いつしか相手のペースに乗せられてしまい、とうとう七月の下旬には同行を承諾してしまった。今思うと、歩くことには多少の自信もあったので内心では「一度ぐらい記念になるからいいか」という気持ちもあったのだろう。

承諾したからには仕方がない。実行の日は八月第一週の土日（95年8月5・6日）と決まった。田舎で小・中学生ぐらいの頃三〜四百メートルの山を登った程度でこのような高い山はスキー以外全く経験が無い。当日までの一週間余り、とりあえず、どの様な装備が必要なのか、どんな感じで登って行くのか位は把握しておかねばと思い、本屋へ行き「富士登山ガイドブック」を購入し読んでみた。必要な装備・携行品として書かれていたものは、下記のようなものだった。

ガイドブックを読んでいると、「最も重要なことは、いかに

富士登山のための装備・携行品一覧

| | 品名 | 備考 |
|-----|-----------------|---|
| 装 | Tシャツ | 濡れた時の予備も |
| | 長袖シャツ | ジャンパーでも良い。 |
| | セーター | |
| | ズボン | |
| 備 | 手袋または軍手 | 岩を掴んで登ることも度々ある。 |
| | 靴下（厚手と薄手） | 予備も |
| | 登山靴 | 深いものの方が砂礫が入りにくい。 |
| | サブザック | 携行品を入れる |
| 携 | ウインドヤッケまたは | 寒がりの人はダウンのあったもの。 |
| | アノラック | |
| | 雨衣（上・下） | コンパクトなもの |
| | 水筒 | 一人、0.5〜1.0ℓ |
| | 懐中電灯またはヘッドランプ | 電池・電球の予備も |
| | タオルまたは手ぬぐい | |
| | 救急薬品 | 擦り傷、筋肉痛、打撲が多い。 |
| ゴミ袋 | 自分のゴミは、自分で持ち帰る。 | |
| 品 | 身分証明書 | 万一の場合に備えて |
| | その他 | 非常食等（山小屋にあったとしても魔の3〜5倍の値段はする。）、嗜好品、タバコ（山小屋では売っていない）、カメラ、フィルム、ラジオ（雷の接近を知ることもできる）、時計、地図、筆記用具、健康保険証、ちり紙（水溶性）etc. |

気温が低いことになる。夜中に登る訳だから、その時刻に下界で30度を越えることはないだろう。24・26度ぐらいだとすると、山頂は、・・・それなりの防寒対策が重要だ。かといって度々登る訳でもないので新しく装備を揃えるのも出費がかさむ。ウインドヤッケはスキーウェアの上着で代用し、靴のみデイスカウント店で最も安いものを購入した。

二、サイは投げられた

と にかく出発となった。95年8月5日河口湖駅前の富士山五合目行きバス停でHさんと待ち合わせ、16時頃吉田口

五合目に着く。あとで聞いた話だが、Hさんは前の年に富士登山ツアーに参加し、日の出の景色に感動してまた登りたくなったという。ただし、その時は山頂には達せず、途中で断念し、八合目ぐらいで日の出を見たのであった。是非とも今回はと意気込んでいたが、年齢も年齢だし、八合目に達する頃は大丈夫かといった感じであった。ようやく22時頃本八合目富士山ホテルに達し、ここで仮眠となったのだが、狭苦しい中の雑魚寝で料金は五千円である。殆ど仮眠にもならない状態で3時間半ほど横たわって休憩を取り、翌1時半頃再び登り始めたが、登山道は渋滞し山頂まで懐中電灯の光の帯が続いていた。登る



背景は剣ヶ峰

こと3時間余りかかって山頂へ辿り着いたものの、あいにく雲がかかっており、御来光は激しく流れる雲間から時折見えるといったものだった。その後、火口のまわりを半周

（火口の周りを歩くことを「お鉢巡り」という。）し、剣ヶ峰に登ったあと、富士登山駅伝の選手達に声援を送りながら、御殿場口から下山となった。

三、再度挑戦

次 の年もHさんが六月ぐらいになって、そわそわと社内内の誰彼となく登山の誘いをかけている様子だった。結局、

今度は社内の若手2人も挑戦することになったという。それでHさんや自分達のみでは心許無いので付いてきてくれという話だった。「昨年は、日の出が良く見えなかったもので、もう一度だけ登ってみるか」と、今回はやや積極的な気持ちで再挑戦することとした。ところが、社内のHさん、H君、N君と小生の4人だけと思っていると、セノンOBのSさん（70歳近く）も参加されるといふ。正直いって、今回は山頂まで辿り着けないかも知れないという気がしてきた。

ともあれ96年8月3日14時昨年同様河口湖駅で待ち合わせ、15時20分頃五合目に着いた。今回は初体験者が3名のうち1名は高齢者ということもあり、五合目で気圧に体を慣らすため一時間以上休憩してから、昨年より更にゆっくりしたペースで登り始めた。

さすがに若手の二人は、七合目までは元気だったが、だいぶ低くなった気圧のせいか七合五勾辺りでダウン気味。そんな頃ある山小屋で寒さに震え、今にも倒れ込みそうな若い女性の二人連れと遭遇し、Hさんが声を掛けたところ、千葉大二年生だという。二人とも山頂へ向かうには、やや薄着の感じだったので、Hさんと小生とで、上に着



六合五勾付近ではまだまだ元気

る物を貸し与え、一緒に登ることになった。仲間が増えて、励ましあって登り始めたせい、か、ややダウンしかけた日君、N君も元氣を出し、いつしか休憩を予定していた山小屋を通り過ぎ、午前1時には山頂に着いてしまった。ところが、山頂の休憩所は開いていない。焚き火をしながら待つこと3時間余、この時の日の出は素晴らしいもどった。

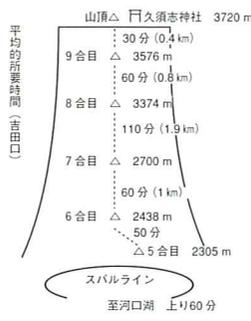
その後、最年長のSさんと小生の2人でお鉢巡りをしたが、ここまでSさんに体力があるとは！ 訊くと週2回はプール通いをしていとのこと、納得した次第であった。



ついに御来光が！
眼下の窪地は山中湖

四、三たび富士へ

そして今年、前回一緒に登る予定で登山靴その他を買い揃えていながら、急用で行けなかった通称「引越し部長」のN君と前回登ったものの、



本当の意味での日本最高峰「剣ヶ峰」まで辿り着けなかったもう一人のN君の二人がどうしてもまた登りたいというので付いて行くことにした。



雲海越しに見る日の出も格別

的には山頂にあまり早く着きすぎないで丁度良かったかもしれない。山頂には3時半過ぎに着いた。御来光が見えるか心配だったが、休憩所で休んでいると、まもなく東の空が明るくなり日の出となった。雲海越しに見る日の出も格別のものがある。

その後、早めの下山をと思い、早速移動を開始した。途中



立つに峰のN君
2人のN君
「臨時郵便局」に立ち寄り、剣ヶ峰には6時半に着いた。今回は影富士もくつきりと見え、なかなか良い登山となった。

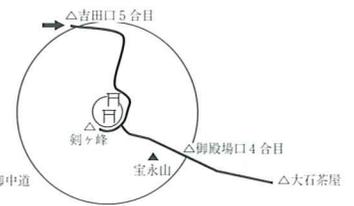
五、エピソード

ところで、富士山頂はこの所有かご存じだろうか？ その答えは、静岡県富士宮市富士山本宮「浅間大社」だといふ。74年の最高裁の判決で、富士山八合目以上は同大社所有地と認定されているのである。しかし、判決後も実質的に国の所有状態が続いている。山頂付近で自治体の境界が未確定のため、登記などの手続が取れないことが原因らしいが、浅間大社では今年3月に至り静岡、山梨両県や関係市町村に境界確定のための陳情を行ったとのことである。

富士山を御神体(コノハナサクヤ姫を祭るが、元来は火山の神であるアサマ神が祭られていたらしい。江戸期に入り山の神を代表するオオヤマツミ神の娘で、火の中で子を産んだとされ

【大まかなスケジュール】

| | | |
|-------------|--------|--|
| 7/31 | 17:50頃 | 河口湖駅前「五合目行」バス停集合 |
| 19:00頃 | | 富士山五合目着：休憩、食事(高山病対策のため、1時間程2300mの気圧に体をなれさせる) |
| 20:00頃 | | 登山開始(吉田口登山道) |
| 21:00頃 | | 六合目着(その後、左上の図の平均的所用時間よりもややゆっくり目に登って行く) |
| 8/1 | 01:00頃 | 八合目着 |
| 03:35頃 | | 山頂着 |
| 04:50頃 | | ご来光を山頂で拝む |
| 05:00~07:30 | | (休憩の後、お鉢巡り出発)(山頂の臨時郵便局で暑中見舞い発送) |
| 06:30頃 | | 剣ヶ峰に立つ(大沢崩れ・影富士を見る) |
| 07:30頃 | | 御殿場口より下山開始(この間7合目から高度差1300mの砂走りを一気に1時間余りで駆け下る) |
| 10:20頃 | | 2合目下大石茶屋着(御殿場線・小田急線経由で帰宅となる) |



今回は若手のみなので、ひたすら寒いだけの、山頂での休憩時間(日の出までの待ち時間)を少なくする意味で、前回より約4時間遅れのスタートとした。慣れている人ならあと2時間程度遅らした出発でも十分日の出に間に合うと思われる(ただし、五合目の売店は20時閉店。今後登られる方のために大体のスケジュールを右に示しておく。

順調に登れはしたものの、この2年の間に体重も増え、さすがに体力の弱まりを痛感した。七合目を過ぎる頃から本格的な雨となり、途中雨宿りしながら登っていったが、結果

この女神が祭神となった。)とする同大社にとって八合目以上は奥宮境内地に当るらしい。同大社は平安時代初期の創建といわれているが、慶長十一年(一六〇六年)に徳川家康から山頂の寄進を受けたとの記録もある。明治維新後は国家神道の政策が進められたこともあり、国有地に編入されていた。戦後、占領軍による政教分離政策・国家神道の解体の過程で、全国各地で国有とされていた境内地が寺社に無償譲与されたが、富士山八合目以上は「公益上の必要」から返還されなかった。このため訴訟に発展し、ようやく先の判決で大社側の所有が認められたといふことらしい。

いずれにしても、そう遠くない将来に八合目以上が「浅間大社」の境内地であることがもつとはっきりした形になることも予想される。また富士山には山麓部を含め、年間三千万人の観光客が押し寄せ、うち、夏山シーズンの二か月間に約三千万人が頂上を目指しているという状態でもある。最近はやや改善されたとはいえ、登山者の捨てるゴミが山頂や登山道に溢れ返り自然環境保護の面でも近年問題となっている。登山者は絶対にゴミを持ち帰るといふ、基本的なマナーを守ることは当然としても、今後夥しい登山者に対し何らかの方法で入山規制するということがあり得るかもしれない。

山頂からの景色の素晴らしさと登山の厳しさを表現した言葉に「富士に登らぬ〇〇に、二度登る〇〇」という言葉がある。貴方もどうですか？ 一度挑戦してみてください！

(法務部・山口)